

文化的オムニボア論再考

—多元的ハビトゥスと文脈効果からみたオムニボア測定の問題—

○駒澤大学 片岡 栄美

1. 研究の目的

趣味と階級に関するブルデュー理論の前提は、階級と文化(趣味)の1対1対応に基づく卓越化戦略(エリートの文化的排他性)に基づくが、ピーターソンほかの研究からグローバル時代の高地位者は正統文化ユニボアではなく文化的オムニボア(文化的雑食性)であることが、日本をはじめ多くの国で明らかにされてきた(Peterson, Bryson, 片岡, Lahire, Bennet 他)。分析目的の第1は、ブルデュー以後の文化と階層をめぐる理論状況を多元的ハビトゥス論の視点から整理し、文化的オムニボア研究の研究動向とともに、ライールのいう文脈の効果や複数ハビトゥスの問題を経験的に検討する。第2に、文化的オムニボアを経験的に測定する際の、方法論的問題を指摘する。第3に、わが国の調査データの分析から文化と社会階層の対応関係がどのような象徴的境界として存在するかを明らかにし、ハビトゥス概念のブルデュー的解釈(実践を統一する一貫した諸性向)とライールの解釈(複数ハビトゥスと多元的決定論)の問題について検討する。

2. 方法・データ 無作為調査データを用い、多重対応分析(MCA)で生活様式空間と社会的位置空間の対応関係を再確認するとともに、文化的嗜好に与える文脈化の効果を実証的に明らかにする。また、関与(活動頻度等)と嗜好(好き嫌い)、関心の程度の3つのレベルで文化への嗜好性を測定し、測定の水準が社会階層的な地位や階級フラクシオンとどのような関連性にあるかについて、多変量解析を用いて明らかにする。理論的には、多元的ハビトゥスとして文化的オムニボアをとらえることの有効性とその意味を明らかにするとともに、文化的オムニボア現象を測定する際の、方法論的な問題について検討する。

3. 主な知見

(1)24項目の文化活動への関与頻度データを分析すると、関与の有無を指標にすれば正統・中間文化の軸と、大衆文化の2軸で説明がついた。この方法では文化的オムニボアは若い年齢層や女性、高地位者に多くみられる現象(片岡 2000)であることが再確認できる。

(2)**測定レベルの問題**としては、測定項目が多いほど、文化的オムニボアである人々の比率は増加し、オムニボア化が一般化するが、それは階級差の消失を意味しない。オムニボアを析出する際の測定方法と指標化の違いに留意することで、文化的オムニボアを分解すると、正統性の高い文化的オムニボア=文化的不協和の現象は女性、高学歴層に多く、正統性の低いオムニボアは男性や学歴低またはブルーカラーから中間階級に多い。

(2)**文脈化の効果**を、興味や活動を始めたきっかけで測定し、家庭経由、学校等の制度的効果、ネットワーク効果、メディア効果に分けて検討した結果、市場化された文化ジャンルでは正統文化でも、家庭経由よりもメディアやネットワーク、学校の影響が強い。つまり多くの正統文化が多様なルートで多様な階層に開かれていた。

(3)文脈化のもう一つの効果として、最終学校での文化活動経験の効果を検討すると、現在活動への連続性が強く現れ、効果が認められた。

(4)上記の文脈化の効果には、背後のメカニズムとして家庭の文化資本と学歴の影響も関連し、文化の再生産はある程度維持されている。

(5)文化的嗜好をめぐる象徴的境界は、関与、嗜好、関心のどの水準でもっとも強く現れるかを、階級クラスと文化的オムニボア層との対応関係から明らかにする(当日資料)。

4. 結論と議論

上記の知見から、継承された文化資本と制度的・関係文脈の効果の関連性を議論する。